読解検定送信フォーム（←国語読解クラスの受講生で、読解検定を受けなかった人は、このフォームから送信してください。）

読解検定長文小４秋11月　講師コード：　　パスワード：　　） 送信

読解マラソン集 ５番 「いれもの」は、 tu3

「いれもの」は、実用的にいえば文字どおり、「もの」を「いれる」ための「もの」ということであって、それ以上でも以下でもない性質のものだ。

しかし、「いれもの」をたんに実用的機能の面だけで割り切って考えることができないのも、人間のおもしろいところだ。もちろん、要するに、ものがはいればそれでよい、というので、ありあわせの古いボール箱などを「いれもの」として使うこともあるが、それは、たとえば引越しのとき、といった臨時の「いれもの」であって、まがりなりにも、生活備品としての「いれもの」には、われわれはなんらかの美的くふうを凝らす。古いボール箱に紙をはり、空きカンにはペンキを塗る。「いれもの」は、うつくしくなければならないのだ。「いれもの」がうつくしくなければ、生活そのものがうつくしくないのである。

商品化された「いれもの」を買うときのわれわれは、ときとして、そのなかにはいるものを買うときよりも慎重である。たとえば、小麦粉だの砂糖だのは、日常の必需品であって、べつに銘柄を指定することもないが、それらの食品をいれるキャニスターを買うときには、あちこちの店を歩きまわって、よいデザインの品物をさがす。値段が多少高くても、うつくしいものを手にいれようと一生けんめいになる。

タンスなどもそうだ。値段と実用性からいえば、デパートの特価品売り場にたくさんタンスがならんでいるから、そのなかからえらべばそれでよいのだが、ながく使う家具、と思うと、なかなか実用一点ばりで気軽に買う気にはなれない。使われている材料だのデザインだのを吟味して、いいタンスをさがしまわる。

つまり、「いれもの」は、たんなる「ものいれ」ではないのである。「いれもの」はそれじたいの価値をもつものである。まえにあげた女性のハンドバッグなどもその一例だ。実用機能からいえば、財布だの化粧品だのといった小物がそのなかにはいればそれでよいので、極端にいえば、丈夫な紙袋だって間にあう。しかし、そう

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

はゆかない。ハンドバッグは、「ものいれ」なのではなく、それじしん、うつくしい「もの」でなければならないのである。だから、ハンドバッグその他の袋ものに、高いおカネを払う。

そればかりではない。「いれもの」がうつくしい「もの」であることによって、そのなかにはいるものの価値もすっかりかわってしまうからふしぎである。

（加藤秀俊「暮しの思想」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

読解マラソン集 6番 城あとのまん中に、 tu3

城あとのまん中に、ちいさな山があって、上のやぶには、野ぶどうの実がにじのようにうれていました。さて、かすかなかすかな日照り雨が降りましたので、草はきらきらと光り、向こうの山は暗くなりました。そのかすかなかすかな日照り雨がはれましたので、草はきらきら光り、向こうの山は明るくなって、たいへんまぶしそうに笑っています。そっちの方から、もずが、まるで音ぷをばらばらにしてふりまいたように飛んできて、みんな一度に、銀のすすきのほにとまりました。

野ぶどうはかんげきしてすきとおった深い息をつき、葉からしずくをぽたぽたこぼしました。

東のはいいろの山脈の上を、冷たい風がふっと通って、大きなにじが、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれました。そこで、野ぶどうの青白い樹液は、はげしくはげしく波うちました。

そうです。今日こそただの一言でも、にじとことばをかわしたい。丘の上の小さな野ぶどうの木が、夜の空にもえる青いほのおよりも、もっと強い、もっとかなしいおもいを、はるかの美しいにじにささげると、ただこれだけを伝えたい、ああ、それからならば、それからならば、実や葉が風にちぎられて、あの明るい冷たいまっ白の冬のねむりにはいっても、あるいはそのままかれてしまってもいいのでした。

「にじさん。どうか、ちょっとこっちを見てください。」野ぶどうは、ふだんのすきとおる声もどこかへ行って、しわがれた声を風に半分とられながら叫びました。

やさしいにじは、うっとり西のあおい空をながめていたおおきなあおいひとみを、野ぶどうに向けました。

「なにかご用でいらっしゃいますか。あなたは野ぶどうさんでしょう。」

野ぶどうはまるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえてかがやいて、いきがせわしくて思うようにものが言えませんでした。

「どうか私のうやまいを受け取ってください。」

にじは大きくいきをつきましたので、黄やすみれ色は一つずつ声をあげるようにかがやきました。そして言いました。

「うやまいを受けることはあなたもおなじです。なぜそんないんきな顔をなさるのですか。」

「私はもう死んでもいいのです。」

「どうしてそんなことを、言うのです。あなたはまだお若いではありませんか。」

（宮沢賢治「花の童話集」）

　あまがえるどもは、はこんできた石にこしかけてため息をついたり、土の上に大の字になってねたりしています。そのかげぼうしは青く日がすきとおって地面に美しく落ちていました。団長はおこって急いで鉄の棒を取りに家の中にはいりますと、その間に、目をさましていたあまがえるは、ねていたものをゆり起こして、団長がまたでてきたときは、もうみんなちゃんと立っていました。カイロ団長がもうしました。

「なんだ。のろまども。今までかかってたったこれだけしか運ばないのか。なんというきさまらはいくじなしだ。おれなどは石の九百貫やそこら、三十分で運んで見せるぞ。」

「とても私らにはできません。私らはもう死にそうなんです。」

「えい。いくじなしめ。早く運べ。晩までにできなかったら、みんな警察へやってしまうぞ。警察ではシュッポンと首を切るぞ。ばかめ。」

　あまがえるはみんなやけくそになってさけびました。

「どうか早く警察へやってください。シュッポン、シュッポンと聞いているとなんだかおもしろいような気がします。」

　カイロ団長はおこってさけびだしました。

「えい、馬鹿者めいくじなしめ。えい、ガーアアアアアアアアアア。」

カイロ団長はなんだか変な顔をして口をパタンととじました。ところが、「ガーアアアアアアアア」という音はまだつづいています。それはまったくカイロ団長ののどからでたのではありませんでした。かの青空高くひびきわたるかたつむりのメガホーンの声でした。王さまのあたらしい命令のさきぶれでした。

「そら、あたらしいご命令だ。」と、あまがえるもとのさまがえるも、急いでしゃんと立ちました。かたつむりのふくメガホーンの声はいともほがらかにひびきわたりました。

「王さまのあたらしいご命令。王さまのあたらしいご命令。一個条。ひとに物をいいつける方法。第一、ひとにものをいいつけるときはそのいいつけられるものの目方で自分のからだの目方をわって答を見つける。第二、いいつける仕事にその答をかける。第三、その仕事を一ぺん自分で二日間やってみる。以上。その通りやらないものは鳥の国へ引きわたす。」

（宮沢賢治「カイロ団長」）

さああまがえるどもはよろこんだのなんのって、チェッコという算術のうまいかえるなどは、もうすぐ暗算をはじめました。いいつけられるわれわれの目方は拾匁（約三十七グラム）、いいつける団長のめかたは百匁、百匁わる拾匁答十。仕事は九百貫目、九百貫目かける十、答九千貫目（約三万四千キロ）。

「九千貫だよ。おい。みんな。」

「団長さん。さあこれから晩までに四千五百貫目、石をひっぱってください。」

「さあ王様の命令です。引っぱってください。」

今度は、とのさまがえるは、だんだん色がさめて、あめ色にすきとおって、そしてブルブルふるえてまいりました。

あまがえるはみんなでとのさまがえるをかこんで、石のあるところへつれて行きました。そして一貫目ばかりある石へ、綱をむすびつけて

「さあ、これを晩までに四千五百運べばいいのです。」といいながらカイロ団長の肩に綱のさきを引っかけてやりました。団長もやっと覚悟がきまったと見えて、持っていた鉄の棒を投げすてて、目をちゃんときめて、石を運んで行く方角を見さだめましたがまだどうもほんとうに引っぱる気にはなりませんでした。そこであまがえるは声をそろえてはやしてやりました。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシャ。」

カイロ団長は、はやしにつりこまれて、五へんばかり足をテクテクふんばってつなを引っぱりましたが、石はびくとも動きません。

とのさまがえるはチクチクあせを流して、口をあらんかぎりあけて、フウフウといきをしました。まったくあたりがみんなくらくらして、茶色に見えてしまったのです。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシャ。」

とのさまがえるはまた四へんばかり足をふんばりましたが、おしまいのときは足がキクッと鳴ってくにやりとまがってしまいました。あまがえるは思わずどっとわらいだしました。がどういうわけかそれから急にしいんとなってしまいました。それはそれはしいんとしてしまいました。みなさん、このときのさびしいことといったら私はとても口ではいえません。みなさんはおわかりですか。ドッといっしょに人をあざけりわらってそれからにわかにしいんとなったときのこのさびしいことです。

ところがちょうどそのとき、またもや青ぞら高く、かたつむりのメガホーンの声がひびきわたりました。

「王様のあたらしいご命令。王様のあたらしいご命令。すべてあらゆるいきものはみんな気のいい、かあいそうなものである。けっしてにくんではならん。以上。」それから声がまたむこうのほうへ行って

「王様のあたらしいご命令。」とひびきわたっております。

そこであまがえるは、みんな走りよって、とのさまがえるに水をやったり、まがった足をなおしてやったり、とんとんせなかをたたいたりいたしました。

とのさまがえるはホロホロ悔悟のなみだをこぼして、

「ああ、みなさん、私がわるかったのです。私はもうあなたがたの団長でもなんでもありません。私はやっぱりただのかえるです。あしたから仕立屋をやります。」

あまがえるは、みんなよろこんで、手をパチパチたたきました。

次の日から、あまがえるはもとのようにゆかいにやりはじめました。

（宮沢賢治「カイロ団長」）